

本画

江戸土産

初編

全

213

カ

初編

重本

江戸

土産

初篇

廣重草

金幸堂持



叙



江戸土産の原版は今既に於て一百年宝曆

此のむう書局名高き画士ありて西村重長ありて

多力申一編を遂に改編し給朱春信の画工の是を

翻しておむその海大の流りて給本の尊作し作す

一年祝融の災火より推り彫板畫して烏有なきなり

惜哉此書の如く朱春の好筆ありて給本の中古の風俗を

惜哉此書の如く朱春の好筆ありて給本の中古の風俗を



見ふとれと然ふと河津花あはれのあはれも昔も今も
 びに沿革とるし我らわが世を遠回想し思ひにあはれに
 高麗現在の在る向を思ふ再刻の時も書林金
 幸中を丹誠を込めて遠く他郷の愚小宮へ表を再視の時
 時勢を知る一冊を庶一再刻成の日余序を請余
 達上草紙あはれの巻を巻くは想ふと
 唐成初年日

金水傳人 額 具

初

蘇

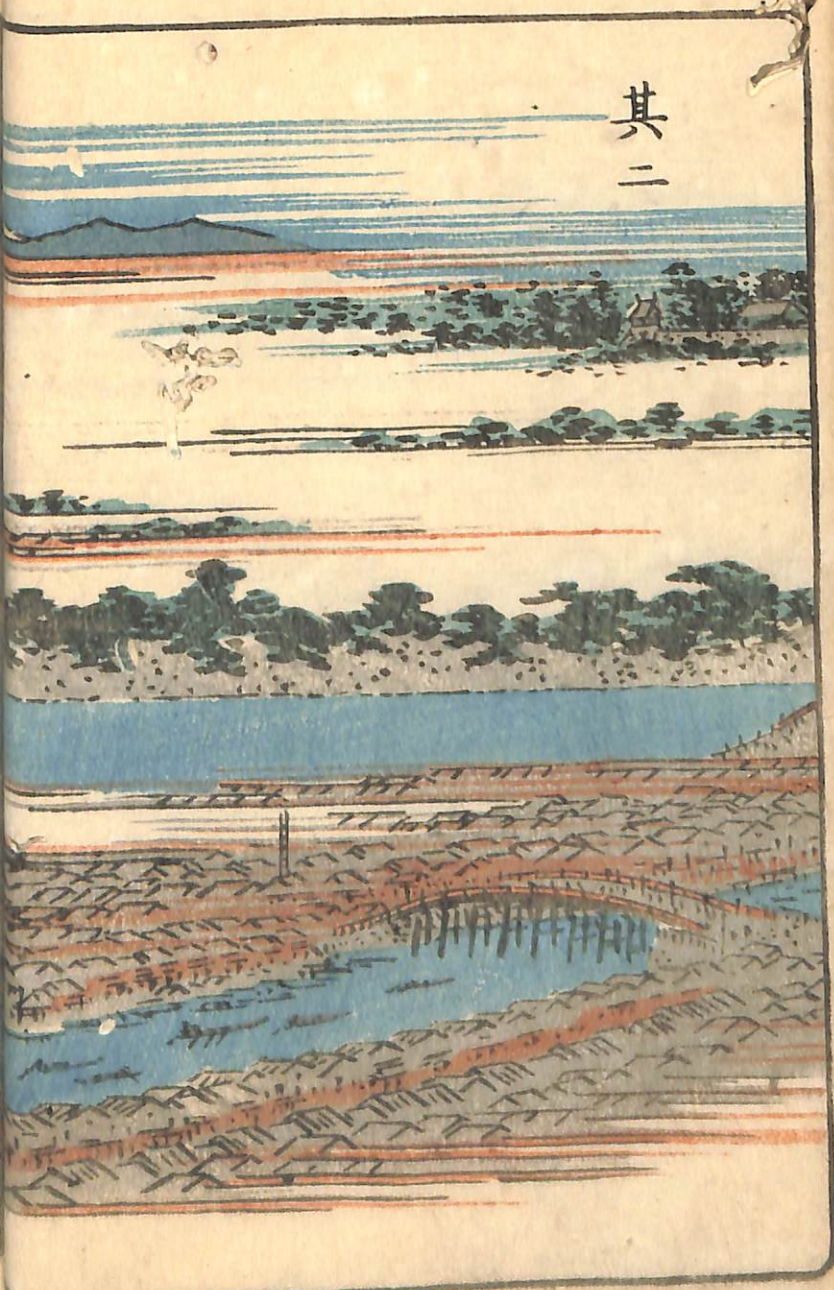
子年

樹





其二



兩國橋

長さ九十六石あり

万治二年小治く深あり

むこうの長巻と中巻の

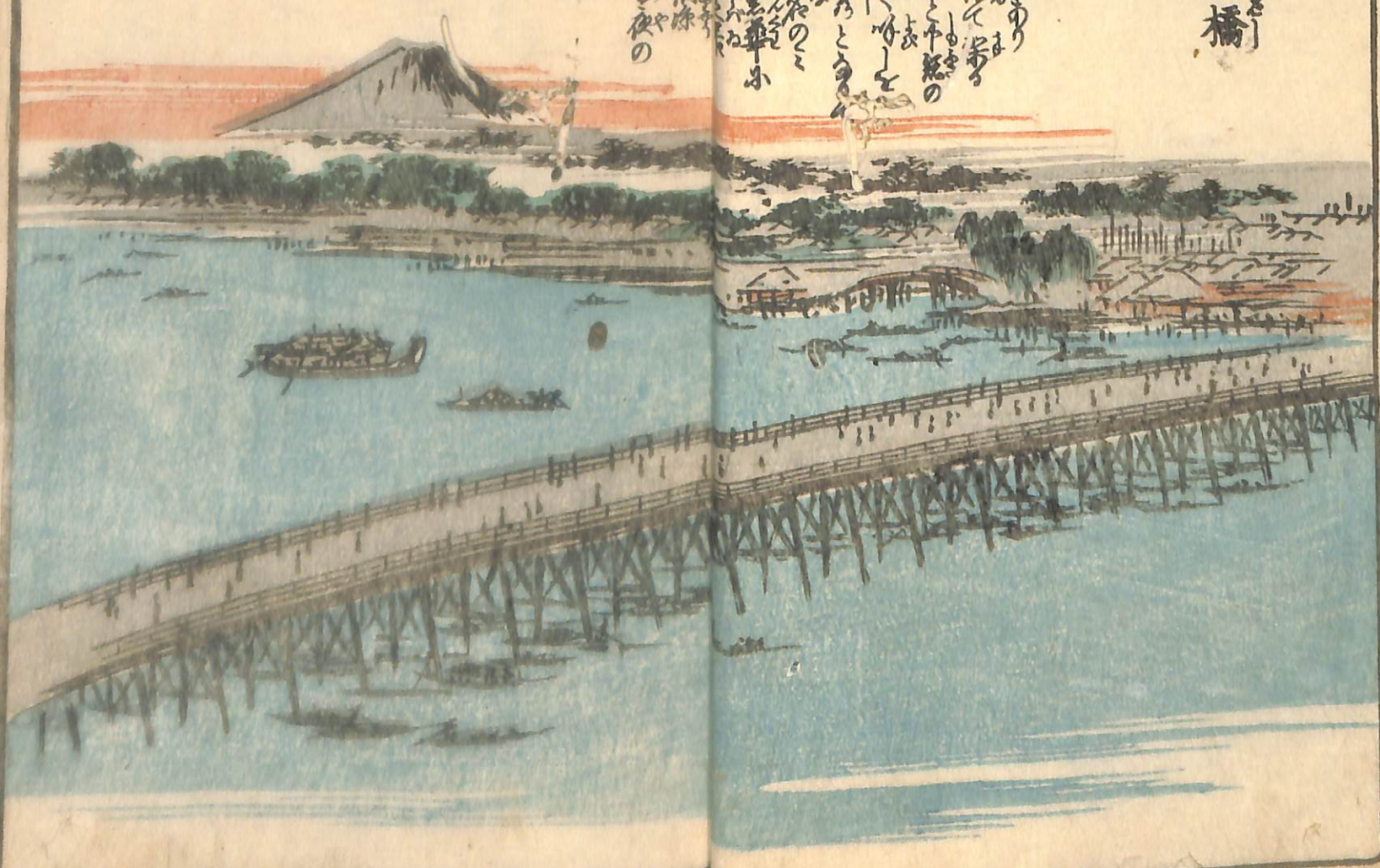
境あり

今のお屋敷とよき

只二五八七の石あり

東に才一の世に小

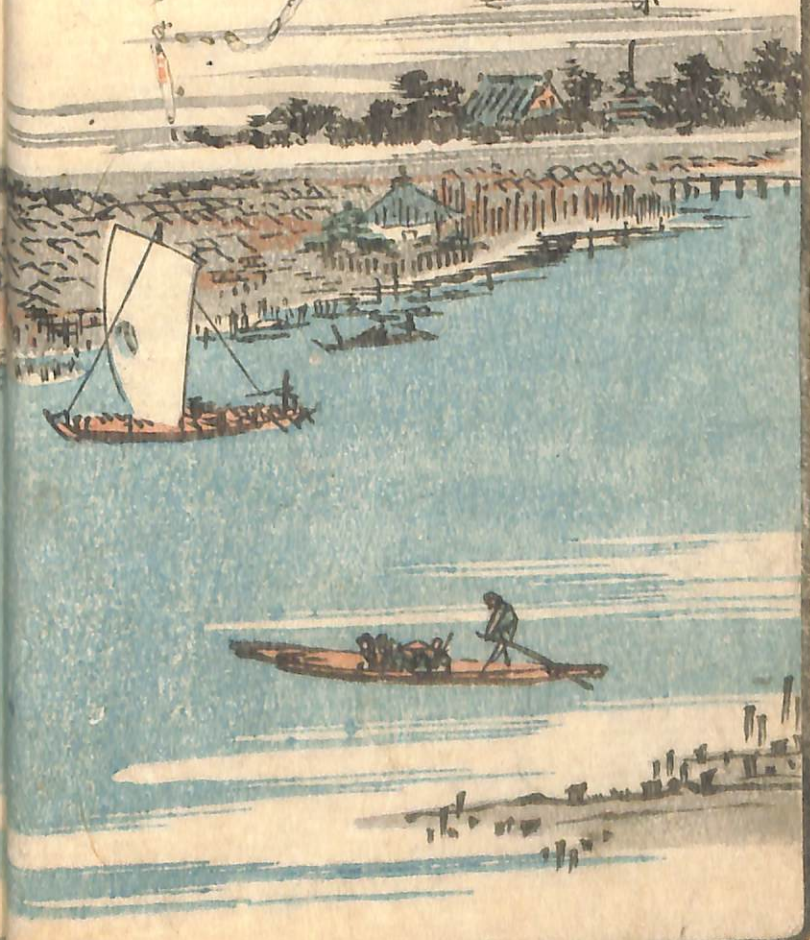
過深釈或は細麻
たきひ
そま大の末巻夜の
任奥終る



御厩河岸
 駒形堂
 金龍山
 遠望



五ヶ所橋より小の方
 凡七八町の上あり
 このころ場の川中
 りとて不遠なるあり
 つたをみす
 筑波の筑田川の
 展曲せる岸小ま自
 物形堂橋と想く
 六ヶ所の橋のこま
 金龍山
 駒形堂
 遠望あり



隅田川
真乳
山の夕景

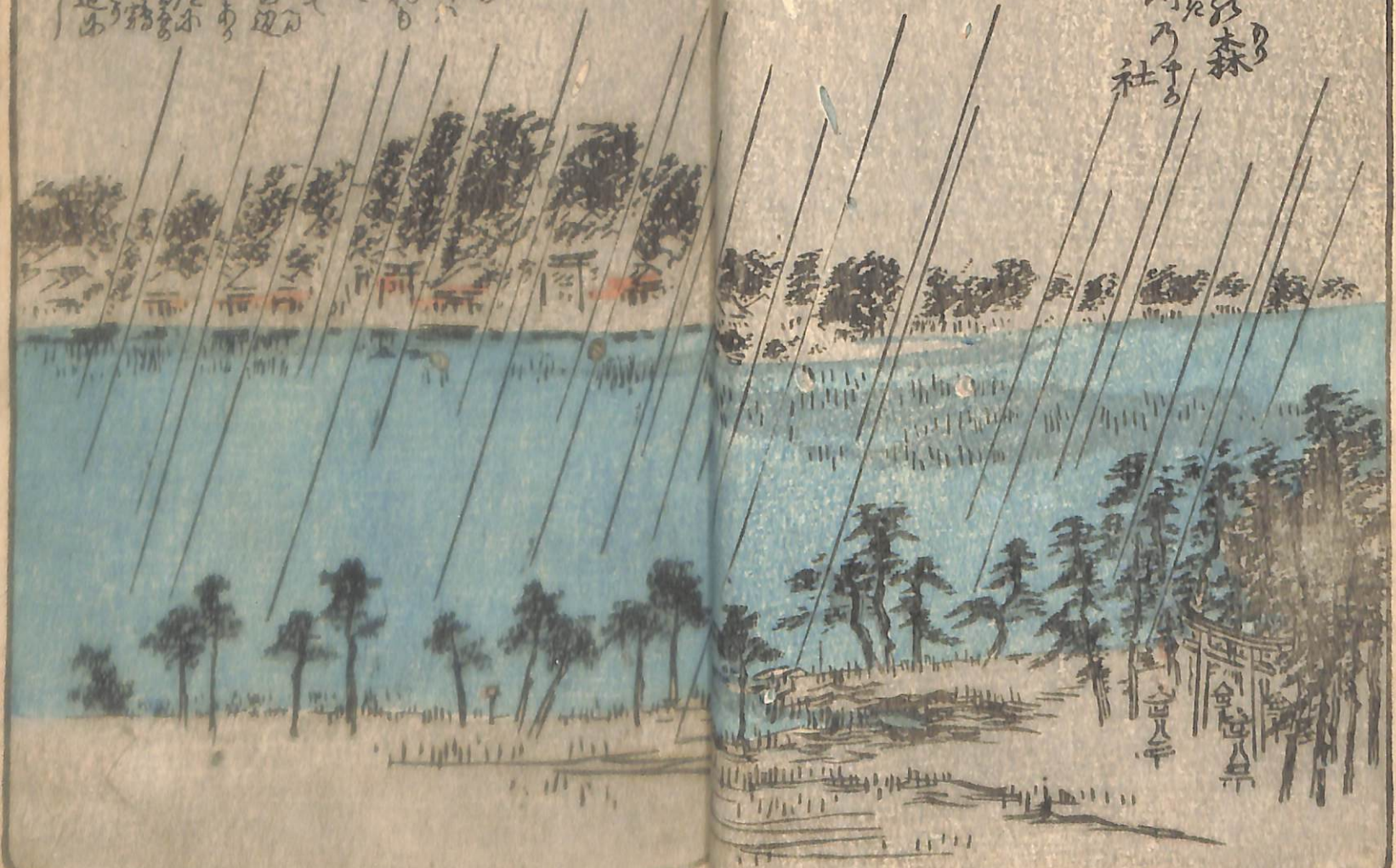


まつちのまをえん
真乳の夕景
人の跡とわうの
名をさしつら
この辺に
音高



まつたけのつとよき
 まつたけのつとよき
 方野々水神
 門向ひのつれり
 古き社ありて
 物春神寂て
 いくすのつたの辺
 深根の風来あり
 待の人のつた
 松すさく水跡
 若木らの辺あり
 てわりーろ

水神社
 真崎乃社
 森



真崎乃社
 森

木母寺
料理屋
御前裁
畑内川

おのち因ふ
橋の傍あり
毎年一月一日
おのち因ふ
おのち因ふ

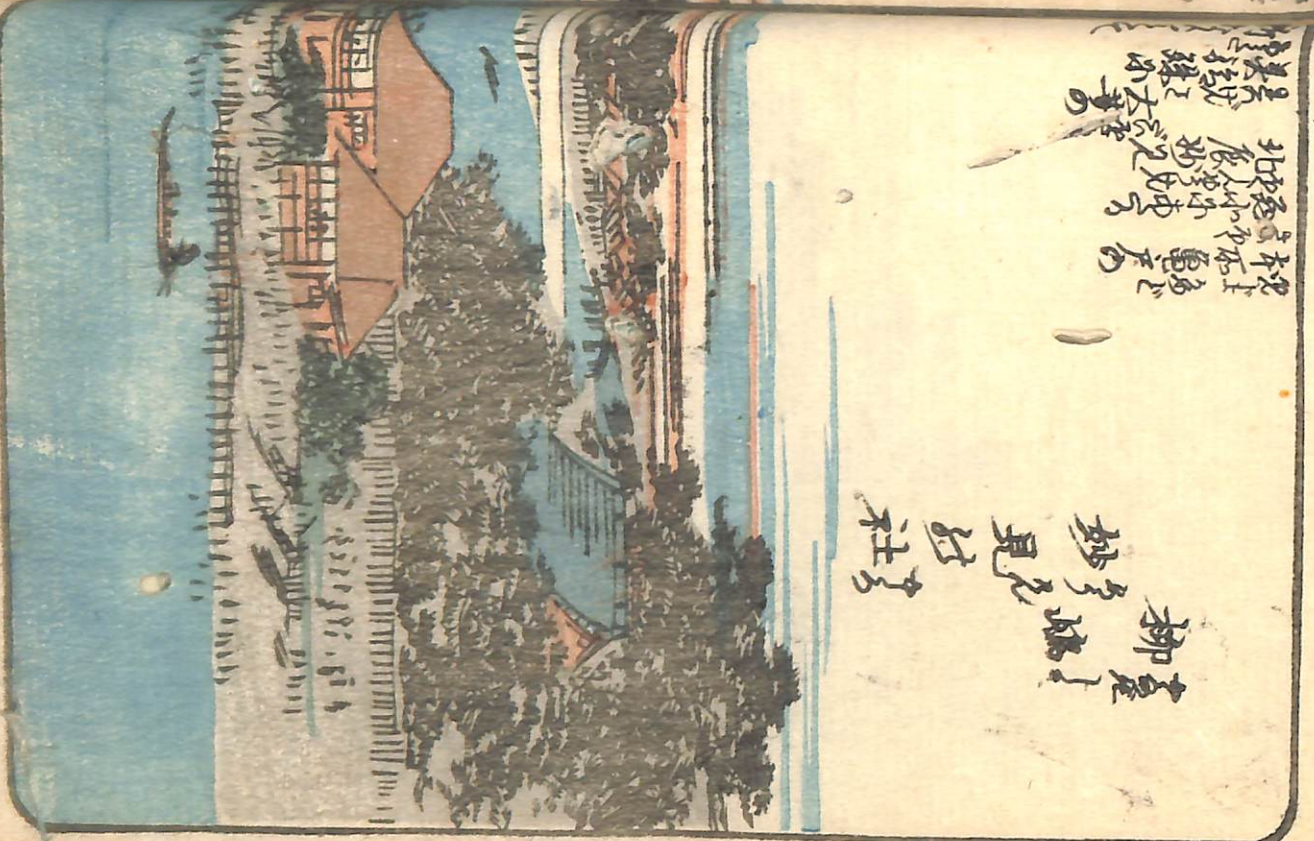
料理屋ありて
橋ありて
おのち因ふ
おのち因ふ
おのち因ふ
おのち因ふ
おのち因ふ
おのち因ふ



柳屋
 見
 社
 妙
 見
 社

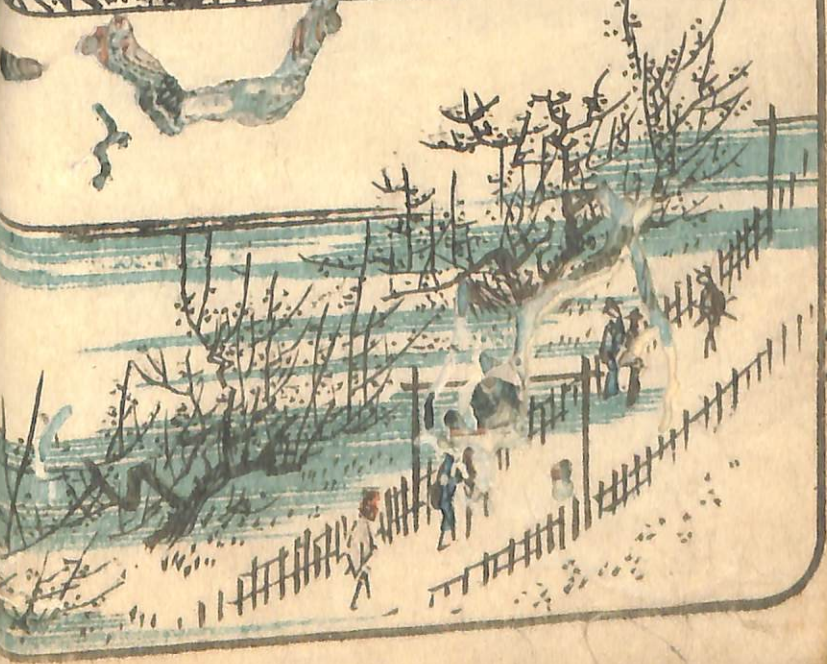


柳屋
 見
 社
 妙
 見
 社





梅屋敷
 梅屋敷の方へ
 梅屋敷の一方
 梅屋敷の一方
 梅屋敷の一方
 梅屋敷の一方
 梅屋敷の一方
 梅屋敷の一方
 梅屋敷の一方



吾人我れ
 及くその及
 龜戸のた
 りんべ〜ん

龜戸

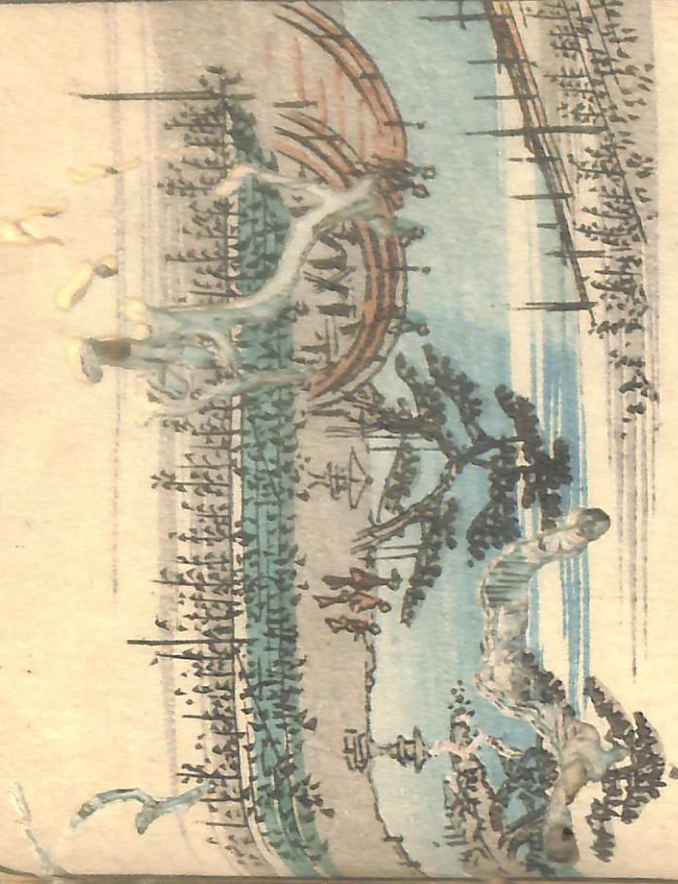
戸ど
 天神

の社

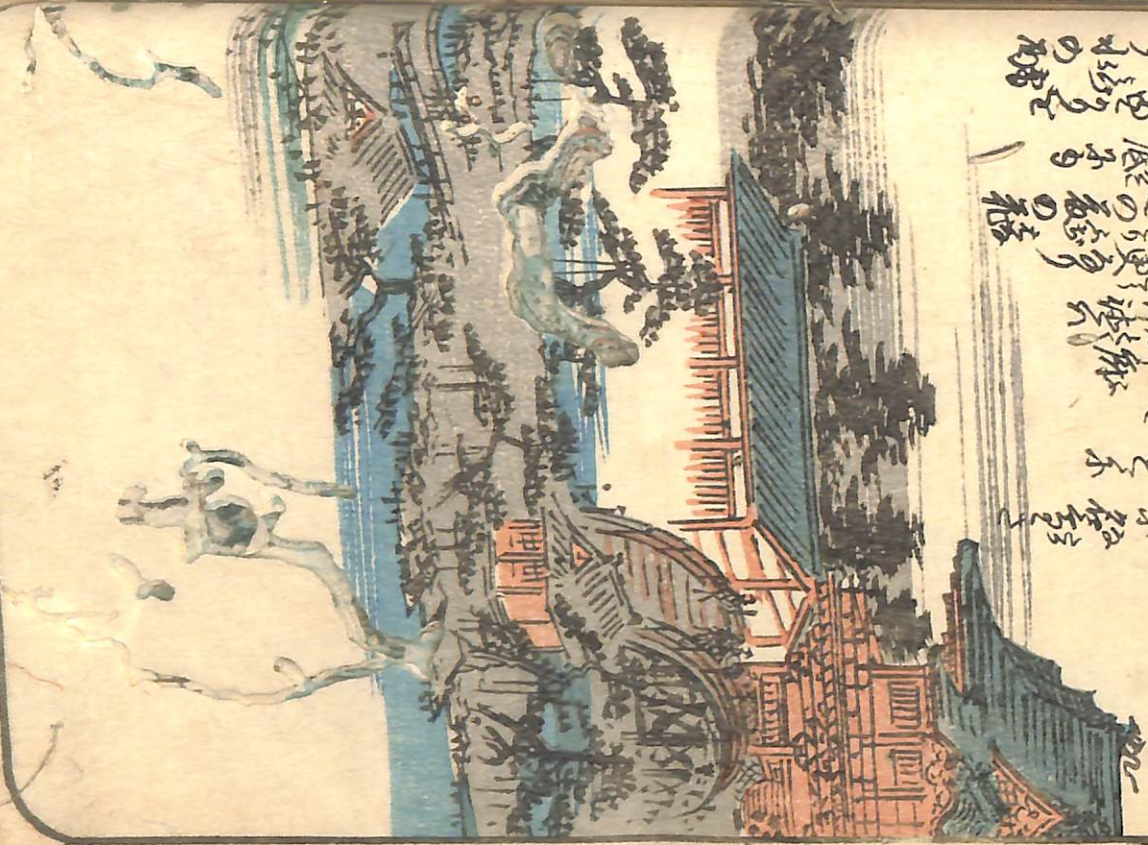


龜戸
天
神
乃
社

此の社は
古くは
天の
神の
御座り
と云ふ
也



此の社は
古くは
天の
神の
御座り
と云ふ
也
其の
由は
古くは
天の
神の
御座り
と云ふ
也



薬師堂

方境内の在りて
のりかみ八橋の川
舟をさす



花らぬるあめり
のりかみ八橋の川
舟をさす
まご入の
絶景あり

木下

風川景



一由をきくは
 耕田の在る
 葉の体
 此流の土の
 托板
 うり

空々
 野川
 運の末
 多て濁
 日る波あり
 とまより先
 小松門か
 折角

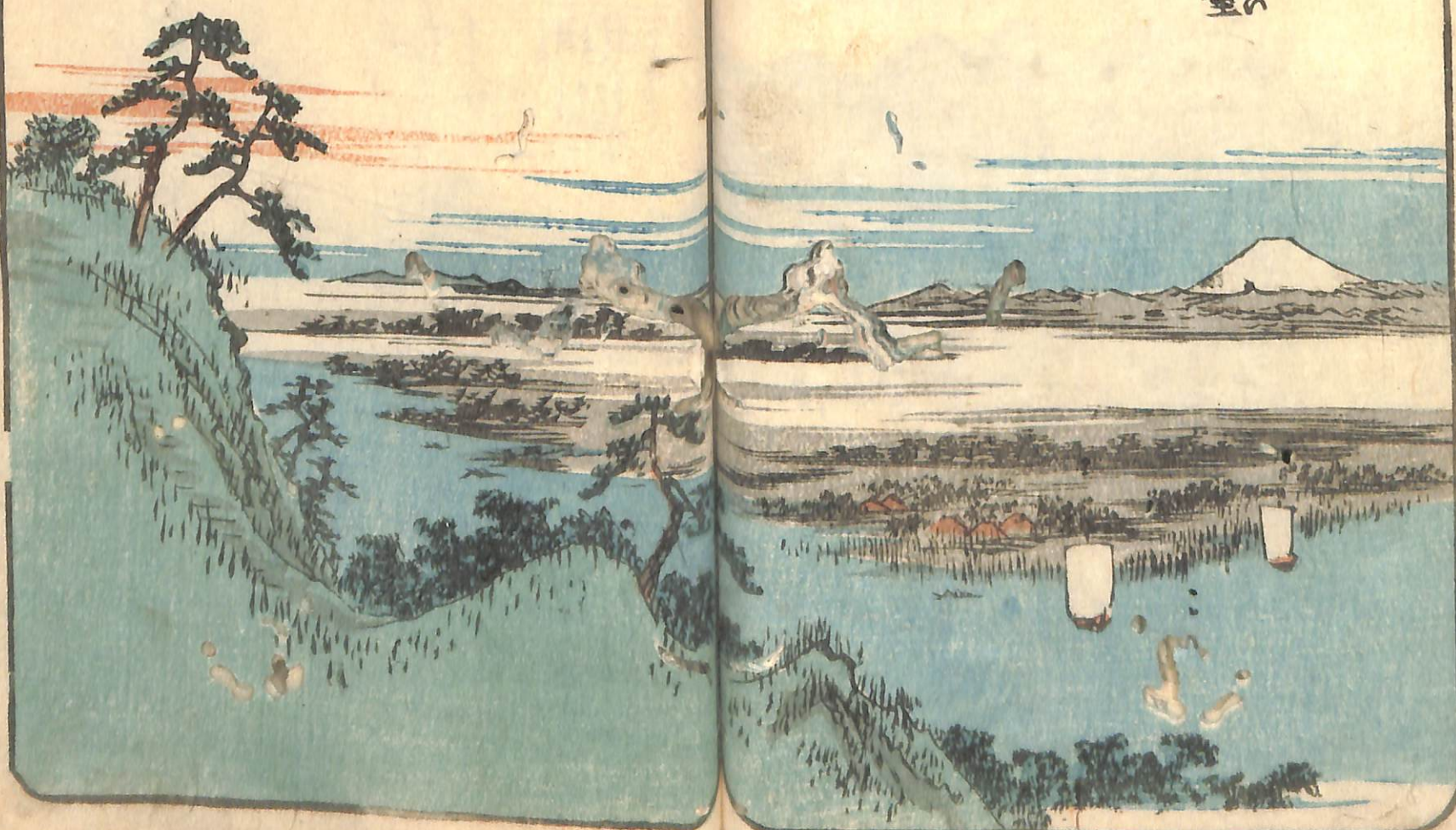
逆井
 乃渡



國府
眺望

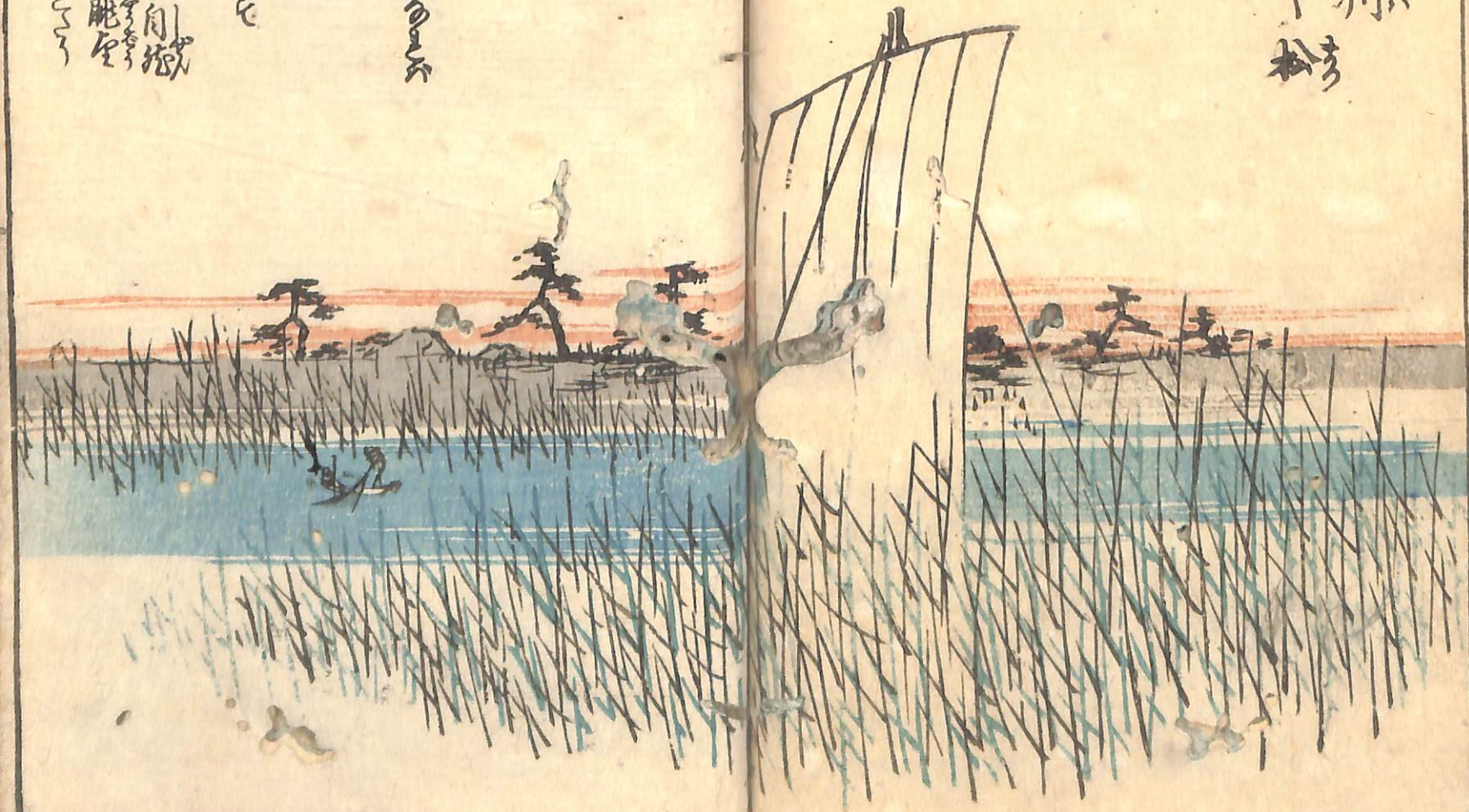
とねがら
利根川
赤壁
万里と
又
里
津
平

戦
と
あ
の
古
いと



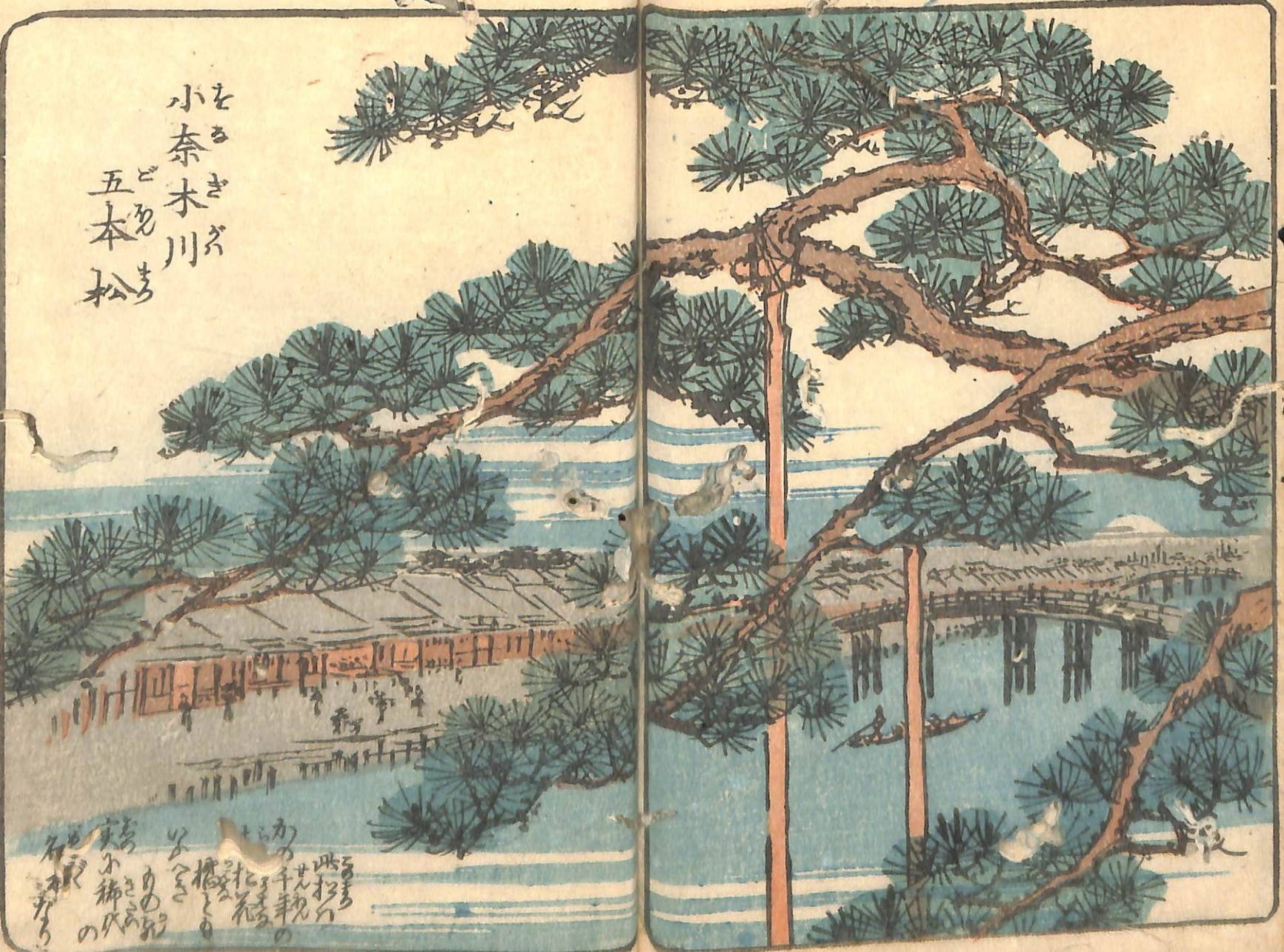
とね
利根川
なま
松

坂東一の大河ありと
いふなり
坂東大と神と
よみ舞と
りか名不とを
川風小梅と
屋曲く松の自松
の振とる一眺を
むつり



小奈木川
 と
 五本松

此の千載の
 松花の
 名は
 実の
 名は
 なる



龜菜池



東都書林

横山町一丁目
 同 三丁目
 兩國吉川町
 大傳馬町三丁目
 同 三丁目
 人形町通り
 同
 米澤町三丁目
 馬喰町二丁目
 同
 同
 同
 出雲寺萬次郎
 和泉屋金右衛門
 山田屋佐助
 丁子屋平兵衛
 平野屋平助
 吉田屋文三郎
 吉田屋源八
 釜屋又兵衛
 西村屋與八
 森屋治兵衛
 山口屋藤兵衛
 菊屋幸三郎
 校

